F−6 家事作業における適性についてI ー安定度を中心としてー

熊本大　奥村美代子

目的　家事作業は，作業方法については規制されない自由作業である。このために作業者は，自分の性格特性や生理的特質に由来する作業方法を，無意識に採用している。作業者の心理的・生理的要因が異なると，これに対応して，同じ家事作業であっても，その作業内容がいくぶん変化してくる。この作業方法と作業者の心理的・生理的要因との関係をみることによって，家事作業における適性を見出そうとする。今回は，作業者の安定ー不安定状態からくる相違について観測した。

方法　MAS，CMI，YGおよび心拍変化率によって抽出した，安定群と不安定群の2群の被験者について，簡単な調理作業と食器洗い作業を行った。各被験者たちの作業過程は，メモモーション測定器で2 sec. 間隔に記録された。この記録フィルムによる作業分析によって，作業差を分析した。

結果　安定群は全体的に動きが多く，動作から次の動作への移転が容易であるのに対して，不安定群は手先の動作が多く，動きが乏しい。安定群は部分的調整を組みこんだ全身的調整による作業をしているとみられるのに対して，不安定群は作業に必要なだけの動作の調整を部分的・綿密に行うために，疲労を来たしやすい作業方法を採用しているといえる。作業成果は，作業の種類によって相違した。